
天に輝く日輪の如く

まどろみ猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天に輝く日輪の如く

【Nコード】

N4170Z

【作者名】

まどろみ猫

【あらすじ】

時は戦国、処は安芸の国。下級武士の娘である小菊こぎくは、突然の事態に戸惑うことしかできなかった…。安芸の国のみならず、中国地方を統べる冷酷なる策略家・毛利元就からのお呼び出し。拒否などできるわけもなく、殺される覚悟を決めた小菊は、高松城へ連れ行かれる…。

日輪の申し子と、小さな菊の花のような娘。他者を拒み孤独に生きる青年と、他者の幸せを願う心優しい娘。

これは、そんな二人の、目には見えない『愛』の物語…。

小さな菊の花（前書き）

はじめまして、まどろみ猫と申します。小説を書くのが趣味です。慣れないパソコンで、人生初の投稿です。

読んで下さる方へ。私は、少しでも上達したいので、できれば感想やアドバイスをお願いします。厳しいお言葉も、自らの糧にしたいと思っております。…ですが、登場人物への批判はおやめください。

この作品は、戦国BASARAの二次創作です。毛利元就様に、幸せになっていただきたいと書きました。しかし、元就様のキャラが崩壊しておりますので、無理と感じた方はお逃げください。

以上、わかったよという方はお読みください。

小さな菊の花

「小菊！小菊はおるか！」

屋敷に響く、父上の声。

縁側で、美しく咲き誇る桜を眺めていた私は、驚いた。

「父上！小菊は、ここにおります！」

普段温和で滅多に大声など出さない父上が、あのように必死に私を呼ぶなんて、何事かあったに違いない。

「小菊！…うう」

「ち、父上！？」

駆け寄ってこられた父上は私を見るなり、泣きだしてしまわれた。「どうされたのですか、父上？」

尋ねても、溢れる涙を拭いてもせずに男泣きにくれる父上。

…父上の涙を見たのは、あの日以来。母上が、亡くなった日。困惑と、不安。それらが胸中に、じわじわと広がっていく。

「…こ、こぎくを…そなた、を…」

「？私が、どうかしたのですか？」

しゃくりあげながらも、父上は言葉を紡ぎだす。

「元就様が、小菊を、た、高松城に、連れてこい、と…」

一瞬、目の前が真っ暗になった。

「わ、私を、ですか？この中国地方を統べていらっしやる毛利元就様が、そうおっしゃられたのですか？」

有り得ない。何かの、間違いだ。そう、思いたいのには。

「高松城から、使いが来た…元就様が、直々の文を…」

父上が握りしめて、くしゃくしゃになってしまった文。

震える手で、受け取る。とても綺麗で読みやすい字が、目に入る。

「貴様の娘を、我が居城である高松城へ連れてこい。従わなければ、貴様の家は取り潰す」

記されている名は、毛利元就。安芸の国の君主にして、中国地方

を統治する、冷酷なる策略家。

「…一体、どういうことでしょう…」

下級武士の娘である私と、元就様に面識などない。なのに、どうして。

「…儂にも、さ、さっぱり、わからん…。あのお方が考えておられることなど…」

そう言うと、父上は再び号泣し始めた。

私は、ただ茫然とすることしかできない。

暖かい風が吹いて、庭の桜の花が、宙を舞った…。

道中、お迎えの輿の中で、私はほんやりと考えていた。

お城に着いたら、どうなるのだろうか。殺されるのかもしれない。

「…理由くらい、教えてくださるかしら…」

四角く切り取られた、青空。香ってくる、花の、優しい香り。

今日が見納めになるかもしれない世界は美しく、輝いて見えた。

片田舎の下級武士の屋敷と、国主のお城では、比較することがま
ず間違っている。

「…すごいです…」

輿から降りて、広い広い部屋に案内される。襖も屏風も、決して
派手ではないが、一目で質の良さがわかった。

一番良い着物を着てきたが、このお城の女中さんのほうが、良い
着物を着ているかもしれない。

世界が、違うのだ。しみじみと、そう思った。

広い部屋で、一人座している間、ずっと父上のことを考えていた。
母上に先立たれ、後妻を娶ることなく、ただ私の成長を楽しみに
して、不器用な愛情を注いでくれた父上。

女の身でありながら、学ぶことを好んだ私を、笑顔で褒めてくれ
た父上。

木に登って降りられなくなった私を、助けてくれた父上。

お城からお迎えが来たときも、泣いていた父上。

『儂が泣くのは、そなたが嫁ぐときと思っておったのに……』

何も、言えなかった。無事で帰ってまいりますなどと、果たせるかわからない約束は、できなかった。

生きるか死ぬか。私の命は、元就様の掌の上。

二度と、会えないかもしれない。…嗚呼。

「…別れの言葉も、感謝の言葉も、言えなかった…」

後悔、している。何も伝えられなかったことを。

そうして、私は独り泣き始めた。

襖が、静かに開かれた。

部屋に入ってきたのは、一人の年若い男性。

私は慌てて涙を拭い、顔を上げた。

「……………」
無言で、男性は私を見つめている。無表情で。

(こ、この方は一体どなたなのでしょう？ずいぶん細身で、お顔が整っていらつしやる…ああ、なんだか視線が痛くて、整っておられるから無表情なのが余計に怖いです…)

突然の男性の登場に、混乱した私の口をついて出た言葉は、

「あの、その…こんにちは…」

しどろもどろな、挨拶だった。

「……………」
男性は無表情なまま、私の前に立った。

(…お、怒らせてしまったのでしょうか！？なんだか、眉間におしわができているような…)

「……………」そなたが、小菊か？」

広い部屋に、静かに響いた男性の声は、氷のように冷たかった。耳を疑うほど冷たいその声に、背が震った。

「は、はい…私が、小菊ですが…。あの、あなた様の、お名前は…」

「？」

見上げた男性の口が、ゆっくりと開かれる。
「我が名は、毛利元就。日輪の申し子なり」

小さな菊の花（後書き）

…この作品を、読んで下さった方はいらっしゃるのでしょうか？
他の方々が投稿された作品を読んで、ますます自信を失くす私です。読むのと書くのでは大違い…でも書きたい。そんな私のことを馬鹿だと思われた方はいらっしゃるでしょうが、それでも私は書き続けます。

投稿は、時間が許す限り頑張ります。小説を読むのと書くのを至福とする私ですが、仕事もありますので不定期となってしまうでしょう。それでも…読んで下さる方がおられたら…嬉しいですよ。

最後に。読んでくださって、ありがとうございました。

記憶の中の面影を追う（前書き）

どうやら、私の書いた作品を読んでくださった方がいらっしやっ
たようです。ありがとうございます！これからも頑張りますので、
よろしければご覧になってください。

…今回は元就様視点です。ここまででは、キャラ崩壊もたいしたこ
とはありません。この話以降の元就様は、暴走されます。

記憶の中の面影を追う

我は、安芸の国を治める毛利元就。

毛利の御家を守るのが、我の役目。為さねばならぬこと。

そのためならばと、人の心を殺し、この激しき動乱の時代を生き抜くため、面を被った。

我にあるものは、毛利の家と、それを守るといふ重責と、天に輝く日輪のみ。

…それでよいのだ。あの、四国の鬼のようになど、我は生きられぬ。

誰にも、我は理解できぬ。仕方のないことだ。

所詮は我も、駒の一つでしかないのだ…。

各地の動きに気を払い、政務をこなし、日輪を崇める…。

我に、休息などない。気を抜くことなど、あつてはならない。

謀反によって織田は滅び、霸王・豊臣秀吉が台頭してきた。あの大猿の理想と、それを為さんとするために手にした軍事力を考慮すれば、誰でも予想できることではあるが。

…我は、毛利の家の繁栄と、中国地方が安泰ならば、それ以外はどうでもよい。

城の天守から、輿がやつてくるのが見えた。

あの輿の中に、あやつがいる…。

ざわと、心が騒いだ。…だが、不快ではない。

「…礼を、せねばならぬからな」

あやつは、憶えておるだろうか？

城の一室。中央で一人座しているあやつのは、驚くほど小さく見えた。

…まあ、私の表情は、変わらず無表情なのだが。

我が部屋に入ってきたのに気付いて、あやつが顔を上げた。

…私の鼓動が、少し早まった気がする。

切り揃えられた黒髪は濡れたように艶やかで、肌は白く、人形のように整った顔立ちをしていた。

実際、袖を動かさなければ、本当に人形が安置してあるかのように見えただろう。

長い睫毛に縁どられた、大きな漆黒の瞳に、我が映っていた。

「……………」

言おうと思っていた言葉が、出てこない。座していた者は、私の記憶の中にあやつとは、もはや別の者だった。

我が何も言わぬので、困惑したように視線を揺らしていた娘の、薄桃色の唇が動く。

「あの、その…こんにちは…」

声は、鈴が転がるかのように、澄んでいた。

「……………」

どうやら、我がこの城の城主である毛利元就だと気付いておらぬようだ。もしくは、混乱しておるのか…。

無言のまま、私は娘の前に立つ。

…近くで見ても、やはり小さい。娘の中でも、小柄なほうだろう。作り物のような娘。私はふと、娘の頬に涙の跡があるのに気が付いた。先程袖を動かしていたのは、流していた涙を拭っていたのだろうか？

なぜ、泣いていたのか。我には、解らぬ。

…否。我に理解できぬことなど、あるはずがない。

「……………」

…そなたが、小菊か？
できるだけ、穏やかな声で問う。下級武士の娘とはいえ、幼き日の我を助けてくれた恩人なのだ。

「は、はい…私が、小菊ですが…。あの、あなた様の、お名前は…？」

我を見上げる娘の瞳には、怯えの色があつた。見慣れた、怯えた色。しかし、我が駒どもとはどこか違う。

数瞬で、合点がいった。この娘は、冷酷と称される毛利元就ではなく、突然現れた見知らぬ男に怯えておるのだ。

さて、名を尋ねられて答えぬわけにはいくまい。この小さな娘が、我が名を聞いて畏縮することは確實だが。

「我が名は、毛利元就。日輪の申し子なり」

記憶の中の面影を追う（後書き）

：実を言いますと、私は控えめで健気な女の子が大好きなのです。小菊ちゃんには、私の好みの女の子です。こんな優しい子が、元就様の御心を癒してくれたらという願望が、はっきりと文字に表れています。

読んでくださった方へ、心よりお礼申し上げます。感想、アドバイスお待ちしておりますが、登場人物に対する批判だけはおやめください。

次話も、数日内に投稿してみせますので、読んでいただければ幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4170z/>

天に輝く日輪の如く

2011年12月15日00時54分発行